THE BOOK REVIEW PRESS
図書新聞
3726号
2026-3-7 土
〒169-0075東京都新宿区高田馬場3-13-1 ノークビル3階
（清瀬オフィス）〒204-0011東京都清瀬市下清戸3-928-2
電話042(497)2785 FAX042(497)2776
振替00180-2-673481
定価300円（本体273円）
発行　武久出版㈱©

SIGNA.COM
シグナ.com
出版物・広告――データ制作のあれこれ
※企画※編集※デザイン※校正校閲※翻訳
https://signa-signa.com

掛け値なしの壮挙

日本のバルザック研究のレベルを示す全20巻

柏木隆雄 対談 石井洋二郎

KASHIWAGI Takao 大阪大学名誉教授　ISHII Yojiro 東京大学名誉教授

対談　柏木隆雄×石井洋二郎　バルザック『人間喜劇』（全二〇巻、水声社）

▼オノレ・ド・バルザック著、私市保彦・柏木隆雄・鎌田隆行・澤田肇・芳川泰久・岩村和泉訳『人間喜劇　第1巻――風俗研究／私生活情景』11・20刊、A5判八二二頁・本体一二〇〇円・水声社

P・オースター著『バウムガートナー』（柴田元幸訳、新潮社）を読む

バルザック『人間喜劇』全20巻が水声社より刊行中である。空恐ろしいまでの、壮大な企画である。これを機に、責任編集（の一人）を務める柏木隆雄氏と、石井洋二郎氏に対談していただいた。（対談日・2月4日、東京・大森にて。〔須藤巧・本紙編集〕）

本当に実現不可能だろうと思っていた企画

柏木　これは本当に実現不可能だろうと思っていた企画です。今回の企画は二〇二三年からスタートしました。私市保彦先生が水声社に声をかけられて、『人間喜劇』完訳を目指し、バルザック研究者の多くが協力する形で実現の運びとなりました。今回の刊行は、世界に伍する成果を見せている日本のバルザック研究のレベルを示すものにもなっていると思います。今回、未完の作品や草稿として残っているものも収録し、バルザックの分類した各情景の順番を尊重して、テクストが残っていないものについても概要を付しました。これは担当の鎌田隆行さんの努力の賜物です。未完の作品も含めてバルザックが構想した順に並んでいる『人間喜劇』は、今までシトロン編のスイユ版しかなく、今回の水声社版はさらに綿密なもので、全二〇巻が完結した暁には、世界で初めての、こうであったであろう『人間喜劇』の姿が現れてくるはずです。一八五〇年の死までバルザックは加筆訂正を怠らず、作品の順番を入れ替える指示も残したりしていますので、「これがバルザックの完全な『人間喜劇』だ」とは言いきれないでしょうが、彼の意図に沿った最大限の可能性を追求する出版であることは確かで、世界的にも、これまでにない企画だと、私たちは自負しています。

石井　この出版企画は掛け値なしに壮挙だと思います。バルザックはいわば「言葉の建築家」で、個々の作品が様々に意匠を凝らした建物になっている。それが今回の『人間喜劇』全訳では、それぞれの建物が互いに連関して、一つの都市のようなものを形成していることがはっきり見えてくるのではないでしょうか。ただ、私の理解では、最初に綿密な都市計画があったわけではなく、バルザックは途中から「人間喜劇」という構想でまとめようと思い立った。だから最初から「地図」があったわけではない。今回の全訳はバルザックの構想に沿って刊行されるわけですから、彼の意図した地図の全体像が初めて明らかになると言ってもいいと思うんですね。そうすると、個々の作品の読み方はどのように変わってくる可能性があるでしょうか？

柏木　『人間喜劇』は、百編にも及ぶ長編・短編を総合して「風俗研究」「哲学的研究」「分析的研究」で構成され、「風俗研究」は、さらに「私生活情景」「地方生活情景」「パリ生活情景」「政治生活情景」「軍隊生活情景」「田園生活情景」の六つの情景からなります。このアイデアはどこから来たのか。第一巻冒頭の「総序」はその説明ですが、しかし各作品の連関の実際については、順序の意図を詳しく論じたものはほとんどありません。第1巻から第4巻までの「私生活情景」は、若い娘の失敗のテーマで始まり、まず『鞠打つ猫の店』（第一巻P57～）は、老舗のラシャ地屋の二人の娘がいる。姉は堅実に店の番頭と結婚し、妹は貴族の画家と結婚したが失敗する。次の作品『ゾーの舞踏会』（同P121～）は、大貴族としか結婚しないと言う大貴族の娘が、舞踏会で知り合った青年に心を寄せる。絶対に貴族の子弟だと思ったその男が、とある店のカウンターで生地を売っているのを目にして結婚をやめる。しかし

【2面へ……】

主な目次

主な書評　3～6面
A・レクヴィッツ『独自性の社会』（高橋顕也）
川村悠人『ソシュールとインド』（金澤忠信）
W・ブッシュ『カスパー・ダーヴィト・フリードリヒ』（落合桃子）
打越文弥・本田由紀編『進学校の進路選択とジェンダー』（中村知世）
村串仁三郎『われわれはなぜ富士山登山鉄道に反対したか』（小祝慶紀）
葛綿正一『自然主義の構造と系譜』（岸規子）
広瀬勉『天沼』（郡淳一郎）
U・エーコ『薔薇の名前［完全版］上・下』（三谷裕）
E・ロビンソン『モンキービーチ』（吉田遼平）
同人誌時評（越田秀男）　5面
連載　読み切り短篇小説（太田靖久）　6面
連載（添田馨）

共和国
全盲で88歳の小説家による最新作品集。
視力を喪失した不安な日常を描き出す表題作のほか、代表作「ガーデナの家族」、出色の短篇「柿の木」を収録。
闇のなかに光を灯す。
▼詳細はQRから
わたしはどこに
片山郷子
四六判並製 208頁／1800円＋税
978-4-911729-03-8 C0093　2月28日発売
editorialrepublica

主義の理論
時代と本能の芸術
木芳子編・訳・著
義者が力を弄び、人々を排他的
る。あの頃もそうだった、そ
の声をあげたのだった!!　感情
主眼を置いた絵画・文学・建築・
術運動を学び直す。　●2400円

世紀の芸術
ュタイン／鈴木芳子訳・解説
への橋渡しを果たした神無きユ
タイン、1920年代をもって「二
格打った!　現代美術の祖型す

人間喜劇　第三巻
バルザック　佐野栄一・芳川泰久他訳　西欧史の画期をなす驚異の大連作小説完訳の試み。榴屋敷『ゴプセック』等六篇を収録。一二〇〇円

奥の国《批評の小径》
Y・ボヌフォワ　小倉和子訳　イタリアのクワトロチェントの絵画、遠い記憶の断片を辿の、夢と現実が迷路を織りなすエセー。二〇〇

フローベールと男性社
森本悠人　フローベールは男性支配の構造かに逸脱したのか。法や文化史を手がかりに研究の視点から作品を読み直す。五〇〇

認知主義に彷徨う
精神分析と認知科学
E・ローラン　小林芳樹訳　現代を代表するン派精神分析家が今日の認知科学の誤謬を明せかけの科学から「主体」を取り返す。二八〇

リベラルアーツと歴史
石井洋二郎・鈴木順子編　無数の史料の言葉を澄ませ、思考をくびきから解き放つ――歴史描き出す創造的リベラルアーツの現在。二五〇

オペラ／音楽劇研究の最前線
佐藤英・大西由紀・岡本佳子・萩原里香・森編　複合芸術として裾野を広げるオペラ／劇。浮上する課題を多角的に論じる。六五〇

かみ派の美術
諏訪につどった前衛た
1969-1974
木内真由美・細谷修平・大司百花・古家満葉編　澤宥の周辺につどい非物質な芸術を目指した派）の芸術を膨大な資料から総覧する。五〇

水声社
文京区小石川2-7-5 〒112-0002
tel. 03-3818-6040 fax. 03-3818-2437
URL：http://www.suiseisha.net/blog/　◎価格は税
【オンラインストア開設しました→https://comet-bc.st

対談　柏木隆雄×石井洋二郎　バルザック『人間喜劇』（全二〇巻、水声社）をめぐって

【……1面から】

男がそこにいたのには理由があって……、と、商人の娘の貴族との結婚。その次は貴族の娘のブルジョワとの恋愛の不幸が語られ、続く『二人の若妻の手記』（同P183〜）は、同じ寄宿舎を出たパリと地方の貴族の娘それぞれが対照的な結婚生活を報告する書簡体小説というように、連環していくのです。この連環の鎖を、「正」と「反」、そして「類似」の要素でつなぎ、一種のリズムを生んでいくことについては、第4巻「私生活情景」の解説で説きました。一作一作の読書も面白いですが、各作品の連関を分析的に見ることによって、バルザックの描き出す世界の奥深さが浮かび上がってくるはずです。今回、訳者による各作品の「解題」に加えて、『人間喜劇』の各〈研究〉、各〈情景〉については、私市先生、私のほか、編集委員の鎌田隆行、松村博史、村田京子の三氏が分析「解説」を担当します。

　小説の分析と言えば、石井さんは水声社から「知の革命家たち」シリーズで『ピエール・ブルデュー——作品科学から象徴革命へ』を刊行されたばかりですね。

ブルデュー、フローベール、バルザック、ゾラ

石井　はい。ブルデューは『芸術の規則』でバルザックに何度も言及していますが、具体的な作品は扱っていません。ブルデューが分析対象にしているのはフローベールの『感情教育』です。彼はこの作品の登場人物や舞台装置を社会的な記号として読み解いていますが、私は、バルザックにもある程度同じ方法が適用できるのではないかと思います。たとえば『ゴリオ爺さん』には主人公の二人の娘が出てきますが、長女は貴族と結婚してフォブール・サン＝ジェルマンに住み、次女は銀行家と結婚してショセ＝ダンタンに住む。この居住地の対比はまさに『感情教育』に出てくるものと同じ構図です。つまりパリという都市空間が社会的に意味化されているということを、バルザックは期せずして書いているわけですね。

　もう一つ、『ゴリオ爺さん』の冒頭では延々と下宿屋の説明が続きますし、「鞠打つ猫の店」の冒頭にも長い情景描写がありますが、フローベールの『感情教育』にも細かな室内の描写が出てきます。特に目を引くのは食事の記述ですね。何度か出てくる晩餐会の場面では、主催者によって供される料理がどう違っているか、出される飲み物がどう違っているかといったことをブルデューは細かく分析していますが、おそらくこの手法はバルザックにも適用できるのではないでしょうか。その意味で『ゴリオ爺さん』などはブルデューにとって格好の題材だと思われるのに、なぜ彼はフローベールの『感情教育』を取り上げたのか。これは二人の作家の本質に関わる重要な問いだと思います。

柏木　ブルデューの理論を知ると、これはバルザックの小説にぴったり当てはまるぞ、と思いました。ブルデューが分析するフローベールはバルザックに多く学んでいると思いますが、バルザックだとモデルや事例が多すぎるということがあるのかもしれません。ブルデューの説く「芸術」の価値評価の問題。例えば『いとこベット』は、芸術作品の創造と、他人の嗜好にそった小物を製作するジレンマに陥いる貴族出の彫刻家シュタインボックが出てくるし、『いとこポンス』の絵画コレクションも、ブルデューが扱ったら、どんなに面白い言説が聞かれるか。バルザックは作中に本物と架空の芸術作品や実在の画家と、バルザックが作り上げた架空画家とを並列するんです。これも分析に値するように思います。「本当らしさ」を演出する技法の一つではあるでしょうが。事例が多すぎると言えば、『人間喜劇』にはバルザックが作った登場人物が二〇〇〇ほど出てきますが、古今の実在の人間も入れると六〇〇〇人くらいになるといいます。

石井　確かに登場人物の異様な多さということもあると思いますが、もう一つ、バルザックとフローベールの体質の違いのようなものもあるような気がしますね。バルザックは登場人物の「個性」とか「人間像」といった要素にこだわりがあって、人間の描き方そのものがしばしば過剰になってしまう。だからこれを社会的な記号に還元しようとしても、どうしても還元しきれない部分、はみ出してしまう部分があるのではないでしょうか。

柏木　バルザックも、登場人物たちを記号化し、カリカチュアライズし、バルザックなりに社会学的な議論を打ち立てようとしていたのではないでしょうか。また、ゾラもバルザックに学びながら、登場人物たちを記号的に、無機的に扱おうとしているようです。一見すると理論的、人工的ですが、バルザックとは違う世界を作ろうとしていたのだと思います。

石井　この点に関連して、先ほど言及した食事の場面に話を戻すと、バルザックの食事の描写からは、味や匂いといったものがなまなましく感じられる。しかしフローベールの描く食事の場面には、そこで供されるものの社会的な意味のほうにむしろ重点があって、味や匂いなどの身体的なものをあまり感じません。これはブルデューに感化された私の偏った印象にすぎないかもしれませんが……。

柏木　いや、ぼくもそう思う。フローベールはむしろ食べ物の味や匂いを感じさせないように書いているのではないですか。バルザックが描くスープは匂い立つようですよね。食事の隠喩的意味合いはバルザックも多用するところですが、食べ物だけでなく『いとこベット』で、マルネフ夫人が意気投合して抱き合うベットの体臭を、「何という嫌な臭い！」と心に呟く。この言葉でおのずから二人の女の特質が浮かび上がってくる。

石井　ゾラの『パリの胃袋』なんかはまさに食べ物の匂いが湯気になってたちのぼってくるような小説ですよね。

柏木　そう。瘴気（しょうき）が立ち上るような描写ですね。

石井　いまの食べ物の話だけでなく、バルザックはよくも悪くも「過剰」な作家だと思うんですよ。「こんなことまで書かなくてもいいのに」と思うようなことも書いてしまう。だからブルデューの言う「作品科学」の対象とするにはあまり向いていない。部分的には彼の手法はいくらでも適用できると思いますが、彼が『感情教育』を素材として作りあげてみせたようなひとつの整合的な社会学的構図は、バルザックでは描きにくかったんじゃないかな。たぶんそこにはエクリチュールをめぐる本質的な差異が横たわっている。バルザックは食欲旺盛で何でも取り込むけど、フローベールはむしろ抑制的で、無駄なものをできるだけ削ぎ落とすことに心血を注いだ。

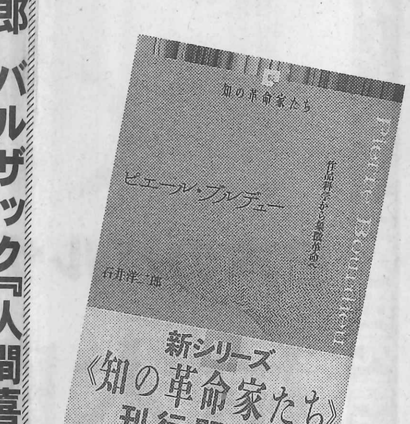
柏木　フローベールは文体そのものもそうじゃないですか。

石井　そう、まさにどこまで削ぎ落せるかという創作態度の違いがありますね。

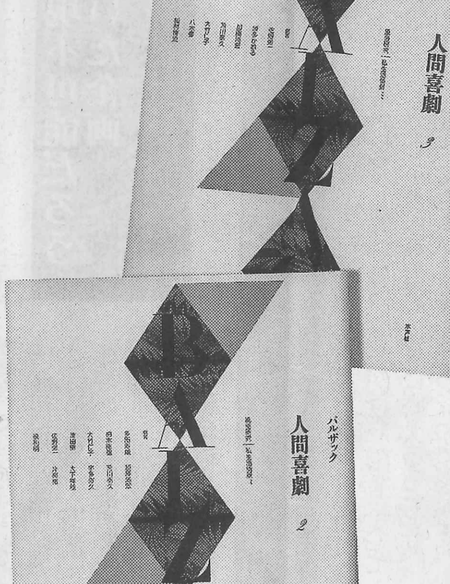
柏木　文章と言えば、これはオフレコだけど、バルザックの文章は面白いけれど、読みにくい。

石井　……それはオフレコなんですか（笑）。

柏木　いやいや（笑）。とにかく何でもない会話が難しい。もちろん息の長い文章もそうだけれど。（へ）



▼石井洋二郎著『ピエール・ブルデュー——作品科学から象徴革命へ』1・25刊、四六判一七六頁・本体一八〇〇円・水声社



▼オノレ・ド・バルザック著、多田寿康・柏木隆雄・大竹仁子・澤田肇・佐野栄一・泉利明・加藤尚宏・芳川泰久・宇多直久・大下祥枝・片桐祐訳『人間喜劇　第2巻——風俗研究／私生活情景』12・20刊、A5判七七四頁・本体一二〇〇〇円・水声社

▼オノレ・ド・バルザック著、佐野栄一・博多かおる・加藤尚宏・芳川泰久・大竹仁子・八木優・松村博史訳『人間喜劇　第3巻——風俗研究／私生活情景』1・30刊、A5判七九〇頁・本体一二〇〇〇円・水声社

暴力の連鎖から逃れる

理解できぬものの存在を認めるということ

吉田遼平

の餌食になっているかもしれない。『モンキービーチ』はマジックリアリズム的世界観の中で、自然がもたらす暴力と対比させつつ、人為的暴力とその連鎖性を描いている。

　一九八九年、カナダの西端ブリティッシュコロンビア州に実在する先住民ハイスラ族の居留地キタマート村。ある日主人公リサの弟ジミーが「間違いを正すため」という謎めいた言葉を残して船で漁に出たきり消息を絶ってしまう。しかしその夜リサはモンキービーチに立つジミーの夢を見る。リサは精霊界と交信する能力を備えており、それする。しかし精霊界の存在をいまだに信じている人間は村でもごくわずかである。物語の冒頭ではカラスがハイスラ語で「海底へ沈んでごらん」とリサに語りかけてくる。弟の居場所を示すメッセージなのではないかと両親に伝えてみるがまるで相手にされず、母親からは抗うつ薬の使用を勧められてしまう始末。先住民の居留地にも、精霊など妄想に過ぎないという現代的な考えがすっかり浸透してしまっている。

　かつては祖母のマ・マ・ウーとミックおじさんがリサを温かく見守ってくれていた。いつの間にか堕落している。オリンピック出場も期待されるほどの水泳の才能を発揮し、異性からも人気だった弟ジミーに対して、リサは密かに劣等感を抱いていた。ミックおじさんに憧れ、いつかはキタマート村を出て退屈な暮らしと決別したいと望んでいたリサ。しかし学校の成績は低迷してしまい、現実逃避から卒業後は地元の缶詰工場で働ければそれで構わないと考え始める。結局自暴自棄になって家出したリサを待っていたのは、酒、煙草、ドラッグ漬けの荒んだ日々だった。

　はじめに述べた復讐への欲てやれるぞ」とリサに忍び寄ってくる不気味な姿の精霊が囁く台詞は「わたしを傷つけたあいつをわたしも傷つけてやりたい」という風に形を変えてリサ自身に語らせることもできたはずである。しかし敢えて精霊の存在をそこに挟むことで、著者のイーデン・ロビンソンが暴力への欲望を内側から湧いてくるものというよりは、外側からもたらされるもの、精霊によって連鎖させられるものとして描写したかったのだということが読者に強く印象づけられる。

　しかし『モンキービーチ』に登場するカラスや小男、サ

分断の諸相（6）

原点に戻るべきだ

添田馨　詩人・批評家

　第二次高市内閣が発足した日の首相会見のトップが、「憲法改正」への意欲であることの異様さに、野党もメディアも国民もなぜ真剣に異を唱えようとしないのか疑問である。国会議員には憲法を遵守する義務がある（99条）。これに対して一国の総理が、それを頭から否定する発言をこのように公式に発表して薄笑いをうかべ、あたかもそれが何かきわめて困難な政治的課題へのヒロイックな挑戦ででもあるかのように、鳴り物入りで喧伝される。

　原点に戻るべきだ。憲法とは国の最高法規として、それは国民から政府への「厳粛な信託」として、ある。憲法とは、そして日本国民の一般意志そのものなのである。これを「改正」つまり書き換えることができるのは、一般意志だけなのである。時の政権党の、たかだかそれも一会派にすぎない集団の偏った共同意志によって、そうやすやすと書き換えが為されてよい道理はどこにもないのだ。

　間違えてはならない。「憲法改正」は選挙によってその成否が判断されるような

性格のもの
挙クーデタ
い今回の大
それに続く
の結果は、
えに立った
を物語るも
後、仮に「
議に必要な
分の二を超
成されるこ
ても、その
「憲法改正
委任を彼等
いう結果証
のだ。
　政治的分
は、私たち
い方向から
のようにそ
いかたちで
断そのもの
していない
が国民を信
ができたと
は、彼らの
時である。
のは、そう
て許さない
ゆきつく果
ち返ってど
く、表明し
る意志を手
だ。

ていなかったのかもしれない。飲み物とか、カップラーメンとか、スナック菓子とか、せいぜいその程度だ。でもいつものレーンをひとつ隣に変えるだけで未知の世界が広がっている。調味料も缶詰も初めて見るものばかりだ。自分が購入したことはおろか、手に取ったことすらもない商品が大量に陳列されている。それらを目当てにする人たちとは接点がないか、もしくは、友人や知人たちが普段食べているものをたいして知らないことになる。

　こういった日々の考察は結局誰にも言えないまま、胸の奥で次第に腐ってしまう。たわいもない想いだということは理解していても、何かに触って気づくことに喜びがある。そういった奈緒に伝えたいし、可能ならわかり合いたい。そういった衝動には負の側面もあって、受験勉強をしようとする意志が削がれる。教科書の知識はどこか絵空事めいていて、手ごたえがないと感じてしまうからだろう。

「いちいち止まるからだめ。動きながら考えなよ」

　苦言を呈してくれているうちはまだ許されているのかもしれない。心持ちが不安定なこの時期に奈緒に捨てられて

とりで作れるし、か
って普通に売れる。
活している人たちが
　沢渕は小中学生の
を一年で辞めたタイ
トを続けながら独学
　彼の話は興味深く
性格というものは先
る事物をつぶさに観
ができれば、後天的
しれない。
　カツオの旬は春と
ガツオ」で、秋は「
ぎたものの、相変わ
かなかった。
　留学を終えて帰国
いた。自信を得たよ
をした後、「私が着

約53000店舗
全国のコンビニエンスストアで図書新聞が購入できます。
ファミリーマート
ローソン
セブン-イレブン
eプリントサービスの対象店にセブン-イレブンが加わりました!
のマルチコピー機で簡単プリント!
イー新聞　コンビニ
http://www.e-shinbun.net/cp

今月の新刊　岩波新書
岩波新書編集部
X（twitter）アカウント
@Iwanami_Shinsho
フェ
江原由美子
江戸町
滝口正哉
張
澁谷由里
老い
鈴木健一

◉本は被災地の「生活必需品」
増補　復興の
稲泉連
被災地で本を売ることに懐疑的だ
東日本大震災後の復興にむけた苦
能登半島地震の取材記を増補。
978-4-00-603

文庫
女たちの
◉ここは地獄。向かう先は、

対談　柏木隆雄×石井洋二郎　バルザック『人間喜劇』（全二〇巻、水声社）をめぐって

（↙）**石井**　そういえば、かつて私は「バルザックのつまらなさ」という文章を書いたことがあります。もちろん逆説的にバルザックはおもしろいという趣旨なんですが、それでも延々と続く描写に耐えられない読者はいっぱいいるわけですよ。いつ物語が動き出すのかわからない。バルザックはなぜあんなに細部にこだわったんでしょうかね？

柏木　冒頭の長々しい描写には意味があることを「解題」で書いてはいるのですが、一つには映画がない時代だから、と言えるかも知れない。どこまで細かく描写できるか、という挑戦と自負でしょうか。それから、ファッションや家具を発信するなど、実在の店も含めて、ブランド化を小説の中で行っている。

石井　なるほど。しかし、描写はしょせん言葉ですよね。だからいくら事細かにモードや食べ物の描写をしてみても、現実の「再現」にはなりえない。たとえば人物の容貌も延々と描写するけれど、結局どんな顔かなんて思い浮かばないですよ。そう考えると、バルザックには何か別の情熱があったのではないかと思いたくなる。言葉を重ねることによって何か別のことを目指していたのではないか。

柏木　身体の頭から足先まで、さらに衣服まで、膨大な語を費やしていますね。とてつもない身体や顔ではあるが、さて絵を描いてみると形にならない。挿絵と文章との齟齬があります。

そうした人物を作り上げる上で「人物再登場法」は、「魔法の杖」だったと思います。それには三つの効果があると考えます。まずは親近性。人物の段階的変化の面白さ。同じ人物を他の場所で見出す楽しみ。例えば黒澤明や小津安二郎の映画に出てくる俳優たちは、役柄が違うけれど、同じ人物が出てくることによって観客がほっとする感があります。これもある種の人物再登場法だと私は思っています。

石井　バルザックの場合、ラスティニャックという人物がいい例だと思いますが、二〇くらいの作品に出てきますよね。だから一介の法学生だった彼が羽振りのいいダンディーになって『幻滅』に再登場したりすると、読者は確かに親しみを覚える。でも今回の作品の並び方で読んでも、その変化がクロノロジックにたどれるわけではないんですよね？

柏木　各巻における小説の配列も制作順ではありませんが、一八三四年にラスティニャックを造形する際に思い付いたという人物再登場法は、時系列で述べられるのではありません。当初ある小説でパリの青年貴族として言及されたラスティニャックは、何冊か後の巻に配列された『ゴリオ爺さん』で、地方からパリに出た初心な青年として登場します。各巻を順に追えば、彼の変貌ぶり、純情な正義感に燃えた青年の後先（あとさき）の変化が面白い。ラスティニャックは人物再登場法の中で出てくる回数が三番目に多いのですが、しかしその多さは必ずしも各作品での彼の重要性を意味しません。むしろ記号として登場することによって登場人物たちの「場」が規定される。

『人間喜劇』全体の主題は何か

石井　よくわかりました。では、ここでちょっと話題を変えましょう。『人間喜劇』全体の主題は何かというと、結局のところ恋と、カネと、権力ではないか。特に、たいていカネがからんでいる。それで思い出したのが、経済学者のトマ・ピケティが『21世紀の資本』でバルザックを何度も引用していることです。中でも、『ゴリオ爺さん』でヴォートランがラスティニャックに説教をする有名な場面。真面目に働いて稼げるお金なんてたかが知れている、金持ちの娘を見つけて結婚するほうがはるかに簡単だと。ピケティは、現代の資本主義社会では、労働によって得られる収入よりも、親から代々受け継いできた資産のほうがはるかに運命の決定要因として大きいということを論証する例としてそれを出してきています。二一世紀の格差社会を語るに際して、一九世紀前半のバルザックの小説が見事に例として当てはまっているわけですね。これは非常に面白い指摘だと思いました。

柏木　ピケティを読んだ経済学者がバルザックを読みだす、ということもあったのではないですか。カネと言えば、貴族の資産は実に膨大なものです。そしてカネと土地に対する異常なまでの執着がある。莫大な財産の誇張した記述のある『ウジェニー・グランデ』はその典型で、一つの「象徴」としてのカネが印象づけられます。具体的、実際的な金銭なのではない。とはいえ確かにカネをめぐるせめぎ合いをバルザックはしつこく書きますね。人間の恋も、カネの前では無に等しいといった哲学を彼は持っていたのではないでしょうか。

恋については、バルザックの作品について良く言われるpassionは、情念か、情熱か、恋か。難しいところですが、いずれにしても、passionはamour（愛、愛情、恋）ではないと思います。

権力、これは社会的な地位の獲得と言い換えてもいいと思いますが、先ほどおっしゃったヴォートランが描くラスティニャックの将来でも、地位を得ることが全部カネに換算されますよね。情念とカネを天秤にかけると、カネに傾く。それが人間ではないか、と。

一方でバルザックは、小間使い、料理女、法律事務所の書記など、篤実で忠実で心の優しい人もきっちり描いています。カネより大事なものがあることを知る人たちです。そしてその人たちは不幸になっていません。そこには優しさ、救いがある。対照的に、悪辣で、主人公を利用しながらのし上がっていく人物も多く描かれていますが、そのバランスがうまく取れているのです。

石井　では、バルザックにも「純愛」を肯定するような指向はあったんでしょうか。いま示してくださったような例は確かにありますが、それよりもやはり圧倒的に多いのは、カネと権力のためなら恋も利用する、という構えのような気がするんですけれども。

柏木　確かにそうですね。ただし、『幻滅』のコラリー、『ユルシュール・ミルエ』、『ピエレット』のヒロインなど、理屈や損得勘定ではない純愛も見られます。

石井　男の側の純愛はどうでしょうかね。

柏木　脇役に多く、主人公ではちょっと今すぐに思いつきませんね。あ、アルベール・サヴァリュスがそうかも知れません。

そう言えば、今度松村博史さんたちが訳出した『サント＝ブーヴ評論選』（幻戯書房）の中で、サント＝ブーヴが、バルザックの文章、文体、書き方には猥褻なところもあると言ってもいますが、バルザックは明示はしないけれど、よく読むと、ポルノグラフィックに読めるところもある。

石井　性について言えば、バルトが分析してみせた『サラジーヌ』では性の境界がゆらぐようなところがありますよね。あるいは、『セラフィタ』なんかもそう。二一世紀のいま、LGBTQが話題になっている世の中から見ると、これは非常に先駆的なものだと思いますが、どうでしょうか？

柏木　ヴォートランもそうですよね。高等下宿「ヴォケー館」の看板に、男女以外に「別の性」があると示唆されます。下宿人ヴォートランは「スフィンクス」と称されますが。スフィンクスは全能の知であると同時に両性で表現される怪物でもある。実際「ホモセクシュアル」を言外にいう言葉も出てくる。当時としては淫靡（いんび）だったものにバルザックは踏み込んでいるし、『金色の眼の娘』でもレズビアンの話が出て、インセストもある。社会的タブーに対して文学者としてどう対峙するかという意識もあったかと思います。

バルザックは今後も読み継がれていくにちがいない

石井　そこがバルザックの奥深さですね。さて、もう一つお聞きしたいのは、『人間喜劇』という訳語それ自体についてです。既に定着しているので変えられない面があるというのはもちろんわかりますが、このタイトルはダンテの『神曲』*La Divina Commedia*の「神の」を「人間の」に置き換えたものですから、Comédieは「喜劇」ではなく「劇」一般を指している。だから「喜劇」と訳すとミスリーディングになってしまうのではないか。コメディ・フランセーズではラシーヌの悲劇も上演していますからね。今回この『人間喜劇』の完訳という壮挙をなすにあたって、タイトルを変えようということにはならなかったですか？

柏木　なかなか厳しい質問ですね。確かに訳題については、新しい訳にすべきだと思う作品もいくつかあるんですが、そして実際石井さんのおっしゃるように、『人間喜劇』の総題も、確かにミスリーディングなところがあるでしょう。戦争中の一九四二年、バルザック「人間劇叢書」という選集（東苑書房刊）も出ているんです。確かにダンテを意識してdivine（神の）をhumaine（人間の）に置き換えたと考えられるし、「風俗研究」「哲学的研究」「分析的研究」と積み上げていくのは、「地獄篇」「煉獄篇」「天国篇」の変形と取れるかもしれません。しかし僕自身は基本的には*la Comédie humaine*の訳は『人間喜劇』でいいと考えます。というのもバルザックが作品の中で用いるcomédieという語は（それはもちろん膨大な回数なのですが）、「喜劇」の意味で使っている場合がほとんどだからです。それと対をなす単語がdrame（ドラマ、劇）で、悲劇的なイメージです。バルザック自身が作中の登場人物たちに課した様々な行動や心理の「ドラマ」を俯瞰して、その全体の動きを「コメディ」、人間が行なう喜劇であると思っていたのではないでしょうか。

石井　なるほど。人間の営みは、死まで含めて、何だかんだ言ってすべて喜劇なんだ、というバルザックの世界観があらわれているということですね。そうした解釈は確かにありうると思います。とはいえ、変えるなら今回が千載一遇の機会だったのでは？（笑）。

柏木　本当にそうですよね（笑）。石井さんのご指摘は、ある意味私たちが当たり前に思い込んでいることを改めて見直す、貴重なもので有難いです。良い機会ということで言えば、紙媒体でこういう形で出版できるのも、今後はおそらくないかも知れません。

石井　この二〇巻が完結した暁には、一般読者は最初から読んだほうがいいのか、それともいままで通り「つまみ食い」でいいのか、ということについてはいかがですか。

柏木　最初から読んでいってほしいけれど、フランスの読者だって最初から最後までずっと読んでいった人なんてほぼいないと思います。しかしその「とっかかり」くらいは作りたいというのが、企画の主旨です。もちろん個々の作品をばらばらに読んでも傑作揃いで、とりわけ一八四〇年以降の作品は、ほとんどすべて手に汗握る面白さです。

石井　多くの読者は既につまみ食いをしているでしょうしね。それをあらためて最初から読むことで、見方が変わりうる。やはりそこが大事なのですね。

二〇世紀のヌーヴォー・ロマンの作家アラン・ロブ＝グリエは、われわれはもうバルザックのようには書けないという意味のことを言っていましたが、それは別にバルザックを否定しているわけではなく、小説は時代によって変化するのが当然であるから、バルザックのような小説をいま書いても意味がないということですね。にもかかわらず、あるいはだからこそ、バルザックはいまなお読み継がれているし、今後も読み継がれていくにちがいない。その確信のもとにこの『人間喜劇』全二〇巻が刊行開始されたわけで、その意味でも全体の完結をいまから楽しみに待ちたいと思います。（了）

…井洋子・知久寿焼のアルバム
176頁　本体7000円

広瀬勉さんの写真と名前をはじめて見たのは、『写真時代』の赤瀬川原平さんの連載「トマソン路上大学」（一九八六）だった。ちくま文庫版『超芸術トマソン』（一九八七）の、巻末近くに掲載され

小説作家や詩人は、いまの私写真家やミュージシャンだと思う。そして、薄くて、判型が自由で、尊いものだったかつての詩集は、いまの写真集だと。

『天沼』は、一九九四年か

としてコントラストをつけて明るく焼いて、すべての写真に随筆の断片のようなキャプションを付けてくれた。このとき、周囲に軋轢を生みまくっていた編集者と関係各位とのあいだで、広瀬さんは、い

争い続けなければならないのは、悲しかった。

わたしは「イカ天」（一九八九–九〇）では、ジッタリン・ジンとマルコシアス・バンプにぞっこんだったので、矢川さんがたまの「T・Cと

を編んで、宇野亜喜良さんにイラストレーションを描き下ろしていただいた詩画集『不滅の少女』（ギャラリー・イヴ、二〇〇一。発行人は、二〇二三年に亡くなった山元千秋さん。その、おかっぱ、紅

真を初めて見た瞬間、これはやはり、ちゃんと本にしなくてはいけないと感覚されて、駅の向こう側で広瀬さんが営業しているバー鳥渡に直行した。版元は、かつて新宿書房で室野井さんの後輩で、『兎

んどの詩や小説はつまらなくなる。ポジとネガが反転してしまう。二〇〇二年に亡くなった時、わたしは矢川さんがご自身が発表した文章を収めた、十一冊のスクラップブックをお預かりしたままだっ

てきた本を手に取って、絶句した。ごく普通の薄口コート紙に、スミ一色で製版・印刷、一冊を極小の細ゴシック一書体、ワン・ウェイト、同一組方向で押し通している。〝Less is more〟の極み。

新刊目録　2・13→2・19

このリストは2月13日〜2月19日発行の書籍を、トーハン・日販等各取次店仕入書籍と同時期の小社到着図書によってまとめたものです。新刊のうちから主なものを選び、小社への寄贈書を選んで掲げました。資料はトーハンの新刊案内を利用させていただき、最新の情報をお伝えすることができました。

中井浩一　へー…
ギアツ　事実…
鹿目由紀　さい…
加藤大樹　女性…
橋本雄太　吃音…
小川仁志　詩哲…

「社会」を根源から考…
橋爪社会学の到達点
社

勉強できるひとしか幸せになれないの？
岩波ジュニアスタ…
高校
―15歳の進路…

岩波ジュニア新書
読むための…
◉小説は面白い。じっくり…
近現代の…
小説のし…
菅原克也

岩波現代文庫
◉「私」が「私」を書くことの…
定本　自意識の昭…
―現象としての「私…
安藤宏
徹底した自意識の追求は、遂には…か〟に至るという表現の構造を…史像を提起した記念碑的著作。
978-4-00-60…

ブレイディみかこ
国家と対決し獄死した金子文子…家エミリー・デイヴィソン。独…ガレット・スキニダー。私を生き…物語。
978-4-00-60…